

更に、カニシュカの名が記され、且つksatrapaの称号を冠する者の名が記された碑文によって、王朝の支配体制が、王、その下に地方に配置された王族、更にその下に在地勢力、という三重構造であったという結論を導き出すことができた。

結 語

本論に於ける考察の結果、ある程度詳細なクシャーン朝の展開を明らかにすることができた。その中で、カニシュカ治下に於ける領域の東端を決定できたのは大きな成果であったと云える。また、王朝の支配体制が、王、その下に地方に配置された王族、更にその下に在地勢力、という三重構造であったという結論を導き出すことができた。しかし、残された問題も多い。

まず、クシャーン朝が展開した当地で盛んに行われてきた考古学の成果を殆ど利用できなかった点が挙げられる。

また、宗教に関する問題も殆ど扱うことができなかった。クシャーン治下でゾロアスター教が信仰されていたことを僅かに述べたが、この点も更に熟考すべき問題である。

そして、クシャーン朝史最大の問題と云える、カニシュカ紀元に言及することができなかったことも大きな反省点として挙げられる。

これら諸問題の解決は、今後の課題としたい。

龍の研究

—— 仏典がもたらした影響について ——

八 木 あゆ美

目 次

はじめに

第1章 仏教伝来以前の中国における龍の表象とその特質

第1節 龍の源流

第2節 春秋・戦国・前漢・後漢時代の文献における龍

第3節 小 結

第2章 インドにおけるナーガの表象とその特質

第1節 仏教成立以前のナーガ

第2節 仏典におけるナーガ

第3節 小 結

第3章 仏教伝来以降の中国における龍の概念の変化

第1節 ナーガと龍の関係について

第2節 龍宮

第3節 龍王・龍女

第4章 中国においてナーガの概念が浸透した社会的背景についての一考察

第1節 中国古来の雨乞い・雩祭

第2節 インド伝来の雨乞い・請雨法

第3節 請雨法の受容

おわりに

序 論

日本における龍、或いはナーガに関する研究は、考古学や民俗学、或いは仏教学の見地から行っているものが多数存在する。ただ、中国における龍、インドにおけるナーガ、と地域別に限定した形で扱っており、ナーガと龍の関係性について考察した論文は、管見の限りにおいてはあまり見られないようである。ナーガと龍との関わりを指摘する声は多いものの、具体的な史料を取り上げて詳細に考察したものは見当たらない。むしろ唐代に成立した代表的な龍宮譚である『劉毅傳』の研究の中で中国の研究成果を引用しつつ付随的に述べられていることが多い。

中国においては、龍とナーガとの関連性について述べた論文が既に幾つか発表されている。代表的なものとしては、霍世休の「唐代伝奇与印度故事」や季羨林の「印度文学在中国」、更には閻雲翔の「印度的那伽與中國的龍」「論印度那伽故事對中國龍王龍女故事的影響」(上・下)等が挙げられる。

本稿ではまず、先行研究の成果を再度検証し、私見を加えつつ仏教伝来以前の中国における龍とインドにおけるナーガがどのようなものであったかをそれぞれ概観した。次に先に述べた、中国の龍の概念にインドのナーガが影響を与えたと考えられるものを具体的にに取り上げて論じた。その上で、ナーガの概念が浸透した理由を、仏教が受け入れられた当時の社会状況を考慮しつつ考察を加えた。

本 論

第1章 仏教伝来以前の中国における龍の表象とその特質

中国では先史時代において既に、龍とおぼしき形象をかたどった遺物が発掘されている。河南省濮陽の西水坡遺跡で発掘された墓では貝殻で作られた龍が発見された。また内蒙古東部の翁牛特旗、三星他拉という村で発見された軟性玉製品も龍であると言われている。更に山西省襄汾県の塔爾山西麓、陶寺という村の遺跡から出土した「蟠龍紋彩陶盤」も龍とされる。先史時代の遺物に現れる形象を龍と断言するのは難しいものの、後代の龍の形象と共通項を有することもまた否定はできない。

文字としての龍が登場するようになるのは、殷の甲骨文である。甲骨文字に龍の原型とおぼしき文字が登場しているが、その読み方や解釈については見解が分かれているのが現状である。いくつかの例を検討すると、殷代の甲骨文における「龍」は方国あるいは族名で 사용되는ことが多く、姻戚関係を結んで殷王朝に服属していた可能性が高い。また確定的な説には至らないものの、祭祀の対象であった可能性がある。殷代の龍族が祀った神は、豊年か否かを占ったり、降雨の有無を問うたりしている以上、水神としての性格が充分に考えられる。この性格は、先史時代の山西襄汾陶寺の「蟠龍紋

彩陶盤」と相通じるだろう。殷代の龍に関して確たることは言い難いが、殊に祭祀と水との関係において後代の龍の性格と一部通じる部分があることは指摘しておきたい。

仏教伝来以前の中国における龍の特性は、大体以下に集約される。

①水との関連性②水辺に棲み、財宝（珠）を守る③魚などに自在に変化する。

仏教伝来以前の中国における龍は超自然的な聖獣であることが見て取れる。

第2章 インドにおけるナーガの表象とその特質

第3章 仏教伝来以降の中国における龍の概念の変化

すでに見てきたように、中国の龍とインドのナーガは共に水と密接な関わりを持ち超自然的な能力を有する点においては共通する。両者の決定的な違いは擬人化された存在であるか否かに尽きる。インドではナーガが擬人化されるのである。中国の龍の概念にインドのナーガの概念が影響を与えたと考えられるのが龍宮、そして龍王・龍女のご故事である。

龍が水辺に棲むというのは春秋・戦国時代から漢代にかけての文献で既に見ることができる。しかしながら現在我々がイメージする龍宮という文字が登場するのは漢訳仏典が中心であり、中国の文献

に見られるようになるのは後の時代のことである。特に影響を与えた可能性が高いのが、『大樓炭經』等の仏典に描かれた海底にあるサーガラ龍王の宮殿に関する記述である。中国において龍宮の記事が頻繁に登場するのは『劉毅傳』等の唐代の小説以降のことである。また春秋・戦国時代から漢代にかけての文献では管見の限りでは龍王や龍女の記載は見当たらない。仏教伝来以前の龍は動物的であり、龍王・龍女といった擬人化した姿はまだ見られない。一方仏典における龍王・龍女についての記事は枚挙に暇がないほど数多く存在する。龍王については『法華經』八大龍王が最も著名であろう。中国の文献で龍王について比較的古い記述は『洛陽伽藍記』や『錄異記』等が挙げられる。

第4章 ナーガの概念が中国に浸透した社会的背景についての一考察

中国の人々がどのようなきっかけでインドのナーガについての知識を得、それを受容したかについては、まだ検討の余地がある。ここではナーガと龍が同一視されるに至った契機を雨乞いという観点から考察を試みた。

インドのナーガも中国の龍も共に雨を降らせる能力を有するが、雨乞いの儀式に関しても共通項が見出せる。中国の伝統的な雨乞いである雩祭では土龍を用いる。またインドの請雨法である『mahamegha-sūtra』（『大雲輪請雨經』に相当）においてもナーガを描

く。つまり双方共に雨乞いの儀式において龍或いはナーガを象った形代を用いるのである。これらの共通項が、仏典のナーガが中国の龍と同一視された理由の一つとして考えられるのではなからうか。

中国では魏晉南北朝以降、仏教が隆盛し、インドからもたらされた經典が続々と漢訳されるようになる。こうした影響で中国においても従来の雨乞いに加えて密教の請雨法が次第に用いられるようになった。『高僧傳』『續高僧傳』等では屢々降雨の驗が語られ、雨を降らせる呪術的能力を有することが高僧たる条件の一つであったことが窺える。注目すべきはこうした僧の中に西域やインド出身の者が多く見られるということである。これらの請雨の記録は、經典名を明記していない場合が多いことを留意せねばならないが、唐の道世は『法苑珠林』の中で祈雨篇を設けて解説をしており、その中で『大雲輪請雨經』を引いているので、恐らくナーガに対して祈雨を行う呪法が中心であったのではなからうか。正史においても、晉代以降、僧侶が雨乞いを行った、或いは寺院で祈雨をしたという記事が見られるようになる。

密教の請雨法の伝来によって中国古来の雩祭が姿を消したわけではない。しかし密教の請雨法の隆盛は、仏典におけるナーガの概念を中国の龍の概念に付加する原因の一つとなったのではないかと考えられるのである。恐らくは儀礼の中で読誦する經典の内容が僧籍にある者のみならず知識人、ひいては大衆に浸透した結果、志怪小説における龍宮譚の確立に至り、やがては中国のみならず朝鮮や日

本にまで影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

ナーガ信仰の歴史は古くインダス文明にその原型を見出すことができる。モヘンジョ・ダロでは、蛇に囲まれたヨーガのポーズの人物像が彫られた凍石小像が出土している。アーリヤ人がインダス川流域に進出した以降、いわゆるヴェーダ時代でも蛇が登場する。ただし、ヴェーダ文獻において *naaga* という言葉は出てこない。ナーガという言葉が、いつ頃から文獻に登場するようになったのかは、現在のところ解明されていないが、仏典におけるナーガの説話の幾つかはインド古来の蛇の伝説に原形を求められることを指摘できる。

ナーガの語は『スッタ・ニパータ』『ダンマパダ』『テーラ・ガーター』等の最古層の仏典に数多く登場するが、修行者・解脱者に関わる比喩としてのナーガとブツダを尊称する言葉としてのナーガの二つのパターンに分割される。ナーガは後の仏伝に現れるような神話的存在のナーガとしては登場しないということが明らかである。

神話的存在としてのナーガは仏伝の中で登場し、ブツダの生涯の中で大きな役割を演じる。密教の時代になると一連の請雨經で降雨の本尊として崇められるに至る。仏教におけるナーガの役割変遷の歴史は、仏教の民間信仰の摂取と密教化を如実に物語っていると言えよう。インドのナーガは以上のような経緯を経て中国にもたらされたのである。

インドにおけるナーガの特性は、大体以下に集約される。

①水との関連性②龍宮に住み、財宝（仏舍利等）を守る③人語を

解し、人と交わる

そこから見えてくるナーガの姿は良くも悪くも多分に人間的であり、超自然的な聖獣である中国の龍とは一線を画す存在であることが見て取れる。

結 論

龍とナーガはその特性や儀礼において水神としての一定の共通項を有し、仏典が伝来した時に同一視された。中国においてナーガの概念が浸透した理由の一つとして、密教の請雨法の隆盛が考えられる。結果としてナーガの影響を受けた新たな龍の概念が、唐代小説等で語られるに至ったと結論づけられる。

三燕に関する一考察

太 田 絵 美

はじめに

第1章 三燕史

第2章 三燕の考古学

第1節 三燕諸遺跡の発見と研究状況

第2節 三燕墓の分類と分期

第3節 副葬品

第3章 三燕の墓制

第1節 三燕墓の構造の源流

第2節 内蒙古の鮮卑墓

第3節 遼東の漢魏晋墓

第4節 三燕前の遼西墓

第5節 三燕の墓制

おわりに

はじめに

三燕とは五胡十六国時代に建国された前燕・後燕・北燕の三つの国を総称していった言葉で、主に考古系研究者の間で使われている名称である。文献史学の研究者は、前燕・後燕を建国したのは慕容鮮卑であり、北燕を建国したのは漢人・馮氏ということで、慕容鮮